

P2-181 不妊症患者における腹腔鏡下子宮筋腫核出術後の妊娠予後因子に関する検討

東邦大医療センター大森病院

森田峰人, 太田邦明, 渡辺慎一郎, 浅川恭行, 片桐由起子, 前村俊満, 間崎和夫, 久保春海

【目的】不妊症患者における腹腔鏡下子宮筋腫核出術 (LM) 後の妊娠予後因子に関する検討を行った。【方法】1996年1月から2003年12月までに主訴に不妊を含み LM を施行して1年以上 follow up しえた97例を対象とした。筋層内筋腫62例, 漿膜下筋腫35例であった。他の不妊因子の認められなかった者は52例, 卵管因子や子宮内膜症などの不妊因子が認められた者は45例であった。ロジスティック回帰分析を用いて目的変数を術後妊娠の有無とし, 年齢, 不妊期間, 核出筋腫核径, 手術時間, 出血量, 摘出物重量, 主な筋腫核の位置, 他の不妊因子の有無などの因子について検討した。【成績】手術成績: 最大筋腫核径 55.5 ± 17.1 mm, 核出筋腫核数/患者 1.9 ± 0.9 個, 手術時間 99.3 ± 31.5 分, 出血量 85.5 ± 59.4 mL, 摘出物重量 128.1 ± 93.9 gであった。術後1年以上の follow up により55例 (56.7%) に自然妊娠が成立した。他の分類による妊娠率は, 筋層内筋腫53.2%, 漿膜下筋腫62.8%, 他の不妊因子の存在しない場合67.3%, 他の不妊因子の存在する場合42.2%であった。ロジスティック回帰分析では, 年齢 (OR1.23, 95% CI 1.04-1.47, $p=0.01$), 最大筋腫核径 (OR2.37, 95% CI 1.23-4.57, $p=0.009$), 核出個数/患者 (OR3.48, 95% CI 1.65-7.32, $p=0.001$), 摘出物重量 (OR0.98, 95% CI 0.96-0.99, $p=0.01$), 他の不妊因子の有無 (OR0.26, 95% CI 0.08-0.78, $p=0.01$) において, 術後の妊娠に関与する因子として相関が認められた。【結論】不妊症患者における LM 後は, 年齢, 筋腫核径, 核出個数, 他の不妊因子の有無を考慮して, 必要に応じて術後早期から ART を含めた不妊治療を検討する必要があると考えられた。

★P2-182 ヒト子宮平滑筋における成体幹細胞の同定と単離慶應大¹, 慶應大生理学²小野政徳¹, 丸山哲夫¹, 升田博隆¹, 梶谷 宇¹, 杉浦育子¹, 荒瀬 透¹, 内田 浩¹, 浅田弘法¹, 岡野栄之², 松崎有未², 青木大輔¹, 吉村泰典¹

【目的】成体 (組織) 幹細胞が, それぞれの器官・組織の維持と再生を担っていることが, 近年明らかとなってきた。DNA 染色色素 (Hoechst) を排泄する side population 細胞 (SP) は, 様々な組織に存在し, 高い組織幹細胞活性を示す。本研究では, ヒト子宮平滑筋における SP の同定・単離と機能解析を通じて, 子宮筋における幹細胞システムの存在を明らかにすることを目的とした。【方法】同意を得た患者の摘出子宮から正常子宮筋層を採取し, 酵素処理により分散細胞を得て Hoechst 染色した後, 子宮筋 SP (MSP) を FACS にて分離した。MSP および MSP 以外の細胞 (non-MSP) の細胞周期を Pyronin Y + Hoechst 法で, 発現遺伝子・蛋白を RT-PCR および免疫染色法で解析した。MSP の多分化能については, アルカリフォスファターゼ活性を指標にして, 骨などへの分化誘導を行うとともに, 免疫不全マウスへの移植実験により, MSP が子宮筋様組織を再構築するかについて調べた。【成績】MSP は, 幹細胞マーカーである ABCG2 を発現しており, 細胞周期上 G0 期の quiescent な状態を呈していた。MSP は in vitro で骨細胞へ分化するとともに, in vivo では平滑筋マーカーを発現する平滑筋組織を構築した。以上の結果は, non-MSP には認められず MSP に特有であった。【結論】MSP が, 1) 未分化状態, 2) 多分化能, 3) 自己組織構築能といった組織幹細胞特性を有することから, 子宮筋において, MSP を中心とする幹細胞システムが存在する可能性が示された。MSP は, 子宮筋の発生機構, 妊娠・分娩における子宮筋の増殖・退縮・機能発現を担う細胞メカニズム, 更に子宮筋腫などの子宮筋由来疾患の病因を解析するうえで, 有用な生物資源となることが期待される。

P2-183 子宮筋腫および子宮腺筋症挙児希望例に対する子宮動脈塞栓術の予後山近記念総合病院¹, 山近記念総合病院外科², 山王病院リプロダクションセンター³猿賀まち子¹, 本田育子¹, 佐藤哲也², 安達英夫¹, 小林善宗³, 井上正人³

【目的】子宮動脈塞栓術 (UAE) は, 子宮筋腫, 子宮腺筋症治療の選択の幅を広げているが, 依然として挙児希望例に対する適応は結論に至っていない。妊娠能への影響を明らかにする目的で, 挙児希望例における UAE 治療の予後を検討した。【方法】対象は当施設で UAE を行った子宮筋腫患者13名, 子宮腺筋症患者5名で, UAE 施行時の平均年齢36.9 (25~43) 歳。UAE 前の筋腫治療は核出術7名, TCR1名, 腺筋症例は複数回の GnRHa 治療が4名であった。全例に妊娠能への影響を説明し文書による同意を得た。UAE は持続硬膜外麻酔下に16名はGS細片を用いて子宮動脈本幹部あるいは上行枝を塞栓した。筋腫2名はマイクロカテーテルを子宮動脈上行枝まで進め PVA 粒子を用いて塞栓した。【成績】挙児希望のため UAE 後10名に行った子宮鏡検査では子宮腔内癒着を6名に認め TCR を行った。マイクロカテーテル施行例は正常子宮内所見を示した。ART を5名に, AIH を7名に行った。UAE 後6名に9回 (50.0%) の妊娠が成立し, 対患者妊娠率は33.3%であった。初回妊娠時の平均年齢は36.2歳, UAE から妊娠までの期間は初回平均14.4 (2~31) カ月, 最長期間4.5年であった。筋腫例は粘膜炎下筋腫2名, 筋層内筋腫1名が妊娠し, 腺筋症例は塞栓効果が不十分な症例で妊娠が成立した。子宮腔内癒着を生じた症例の妊娠は困難であった。2例が出産し, 妊娠継続1例, 3例が流産に至った。【結論】子宮内膜を温存し得る塞栓方法が可能であれば UAE は挙児希望例への適応が考えられ, 選択的 UAE など塞栓方法の工夫が検討されるべき問題と思われる。